

6『現代の貧困～まずは知ることから始めよう～』

○開催目的

「貧困ビジネス」「家庭崩壊」「子どもの貧困」……そんな言葉を日本でもよく耳にする現代。でも、実はあまり実態がわかっていないという人も多いのではないのでしょうか。金曜日に開催した新宿・歌舞伎町でのごみ拾いと連動プログラムとして、フィールドワークの報告を行った後、歌舞伎町からイメージされる「貧困ビジネス（路上生活者）」「風俗」など、現代の貧困について参加者と一緒に考えていければ、と思い企画しました。まずはイメージだけではなく、現実を「知ること」が社会を変える一歩だと思っています。

○開催日時

2月13日（土）10：40～13：10

○参加者数・出演者・団体

参加者数：35名（参加者29名、出演者2名、スタッフ4名）

出演者・団体：角間 淳一郎さん（一般社団法人 GrowAsPeople）
後藤 浩二さん（スーパの会）

○プログラム内容・成果と課題

1 アイスブレイク

- 「ホームレス（路上生活者）」「風俗」からイメージすることを共有
- ・「ホームレス」のイメージ：寒そう、不安、行政が公園から追い出す、生活保障など
- ・「風俗」のイメージ：欲望、JK（女子高生）ビジネス、社会から疎外など
- 双方に共通することとして、孤独感、軽度の知的障がいなど

2 前日の歌舞伎町でのごみ拾いの報告

- 写真を見ながらごみ拾いの様子を報告、ごみ拾い参加者からの感想

3 登壇者からのお話しと質疑応答

- 角間さんより、「風俗」で働く女性の支援について
- ・現代の「風俗」はネットの世界にあり、イメージだけで考えてはいけない。ラベリングしないで欲しい、というお話がありました。
- ・「風俗」を辞めた後の、セカンドキャリアを支援しており、25歳から一気に相談が増えるそうです。
- ・実際の支援として、まず収入の把握を促す。次に、自分の空いている時間を有効に活用し、NPOなどでインターンをしてもらう。その際、自発性を待つことが重要。
- 後藤さんより、路上生活者支援から見る「現代の貧困とは」について
- ・歴史的に「貧困」の概念がどう変わってきたか、という話の中で、現代日本の「社



会的包摂（ソーシャルインクルージョン）の課題として「制度の狭間」が挙げられました。

- ・「自己責任論」が言われる中、当事者が「支援を望まない人」として見られることがあるが、もとも自尊心の欠如も見られることから、しっかり関わって対話し、関係性を作っていくことが必要というお話がありました。

○共通すること

- ・どちらも周りに相談できる人がいない。もしかしたら「居場所」「労働」の問題に近いのではないだろうか。
- ・見えないものをどう見るか、当事者との関係性を作っていく必要がある。



◎ ふり返って

印象的だったのは、そこに至った「入口」を見る人が多いが、そこに至るのは、船に小さな穴が開いているようなもので防げない。だからこそ、「出口」での支援が重要だという言葉でした。その「出口」のハードルがいかに高いか。多様な貧困状態の人がいるが、なかなか当事者だけでは抜け出せない。だからこそ、多様な人々が関わっていく必要があります。しかし、当事者がどこで何をしているのか事実を理解しないと支援はできません。そのためにも、イメージや先入観を持たずにしっかり事実を見る努力を続けていかなければならない、と強く思いました。

最後に、参加者の方に「ホームレス」「風俗」のイメージがどう変わったかを話し合ってもらいました。多くの方のイメージが変わっていました。そこで感じたものから、次のステップが始まるのだと思います。

○参加者の声

- ・身近な問題だと思いました。当事者がどんなに遠くにいても・・・。
- ・孤立について知ることができた。市民社会全体の問題だという認識を得た。
- ・今回、さまざまな事を学べたが、福祉の課題の難しさを感じた。だからこそ、改めて福祉の面白さを感じた。
- ・風俗に対して、貧困や複雑な家庭環境により性的搾取を受けているというイメージがあったが、入口は誰にでもあり得るものであることが分かった。
- ・現場で活動されているお二人のお話は大変示唆に富んだ内容で、貧困や風俗についての表面的な見方がいかに一面的だったか分かった。

○担当者・記録

《担当》	神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）
	内田 智子（認定 NPO 法人 ESA アジア教育支援の会）
	杉村 郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）
《運営サポート》	奥貫 泰行（運営ボランティア）
《記録》	神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）